

本研究は、日常生活と密接な関わりのある住宅に焦点をあて、建築デザイナーの視点からみた「家具」としてのピアノを検討するものである。住宅問題が活発に論じられるようになった大正時代に、建築デザイナーは少なからずピアノに言及した。そうした著述の多くは、専門書というよりも啓蒙書としての性格を持ち、住宅手引書として一般向けに書かれたものであった。なかでも、住宅改良会の機関誌『住宅』は、家事全般に関する記事も編集し、主婦を読者対象に含んでいた。本研究の意図は、これまでのピアノ受容史ではみえづらい「家具」という一面からピアノを捉え、ピアノに対する表象の形成過程の一端を浮き上がらせることにある。

住宅とピアノの関係に着目した研究として、玉川裕子の「憧れと現実——ピアノを通してみる大正の洋楽社会史」(『「音」の社会史——十九世紀におけるその変遷——』「音」の社会史研究会、1990-1991年度報告書)がある。玉川は、大正期の文化住宅とピアノの関係を新中間層という消費者の視点から分析した。これに対して発表者は、建築デザイナーの視点から考察する。

研究発表では、まず、住宅改良運動を背景にピアノが居間の調度品として紹介されるようになる経緯を示す。そのうえで、著述や内装写真を用いて建築デザイナーの視点からみたピアノの事例をいくつかとりあげ、「家具」としてのピアノを検討する。

住宅手引書を繙いていくと、1915(大正4)年に「ピアノ」という語が現われる。当初は客間の調度品として紹介されたピアノは、1919(大正8)年になると、住宅改良運動(二重生活批判に端を発し、応接間を廃して、椅子式を採り入れた家族本位の居間を中心とする住宅を提唱)を受け、居間の調度品として紹介されるようになる。この変化を端的に示すのが、保岡勝也の著述である。保岡は、1915(大正4)年に『理想の住宅』(婦人文庫刊行会)で洋館の客室について述べた際、この部屋には「ピアノその他の楽器を置いてあるのが普通である」とした。しかしその10年後、1925(大正14)年に出版した『小住宅の洋風装飾』(鈴木書店)では、「ピアノ、オルガンの如き楽器は居間に置く可きものである。其室が十分大きく無い場合は止を得ず應接間に置くが之れは変態である。然りに本邦住宅では洋室の居間在に係らず、應接間に置くのを原則の様に心得る人々が多いが之は謬である」と一転した態度を示している。

居間にピアノを配した住宅の実例に、1922(大正11)年に上野公園で開かれた平和記念東京博覧会の「文化村」が挙げられる。全14戸からなる文化村は、住宅問題の解決に着手した建築学会が、学会員に対して「実用的簡易小住宅」の出品を推奨したものである。出展者は、住宅に相応の「家具」を備えることが求められた。これを受け、あめりか屋、島田藤吉、日本セメント株式会社は「家具」としてアップライト・ピアノを備えた住宅を出展した。記録として現存する間取図の書き込みから、三社とも居間にピアノを配したことがわかる。この間取図は、前述の『住宅』に掲載されたため、博覧会に訪れなかった人も文化村を知ることができた。

このような経緯を踏まえたうえで、楽器の一種であるピアノが室内装飾として扱われ、時に、ピアノ自体が装飾される事例を提示する。そして、室内の「調和」や「装飾」をキーワードに「家具」としてのピアノを検討していく。本研究の資料には、設計案や啓蒙的性格をもつ住宅手引書もあり、その点において必ずしも実在した住宅やピアノを取り扱ってはいない。流通したピアノを追う際には取りこぼされるそうした資料を始め、ピアノに言及した建築デザイナーの著述は、ピアノに対する表象の形成過程の一端を担った。本研究は日本のピアノ受容史に新たな可能性を見出す端緒となると考えている。